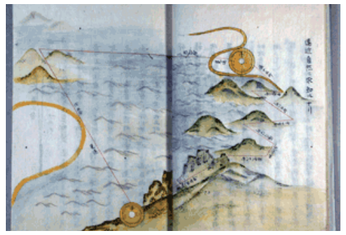
平成27年度伊能忠敬翁顕彰会の総会を開催

平成２７年８月１９日（水曜日）に佐原千与福において平成２７年度定期総会を開催いたしました。
坂本会長から、郷土の偉人である伊能忠敬翁の偉業に学び、佐原のまちづくりの推進に貢献できるよう会として取り組んで参りましょうと挨拶があり、その後議案第１号平成２６年度事業報告及び、収支報告について審議を行い、全会一致で承認されました。
昨年は研修、調査・研究、情報発信、会報発行の４事業を実施しました。
特に調査・研究事業の重点活動でもあるユネスコ記憶遺産登録について、動きがありました。ユネスコ記憶遺産は手書き原稿等の記録物を対象に、世界的重要性を有する物件をユネスコが認定・登録する事業です。
この事業について、今般、日本ユネスコ国内委員会が一般公募したことから、市では市所有の伊能忠敬資料である国宝２３４５点の内「伊能忠敬測量記録・地図」７０５点の申請を行いました。会としても、様々な関係機関等に働きかけを行いました。
また、第２号議案として平成２７年度事業計画及び予算案が審議され、全会一致で承認されました。



平成27年度伊能忠敬翁顕彰会事業

平成２７年度の事業については、次のとおり決定されました。
研修事業
専門家を招いて伊能忠敬翁の偉業及び佐原が繁栄した往時の時代背景や、歴史等を学ぶための研修会を広く開催いたします。
調査・研修事業
ユネスコ世界記憶遺産登録の実現に向けて、市や関係機関と連携して引き続き活動を行ってまいります。
伊能忠敬翁の佐原時代の偉業について、文献等の掘り起しに取り組んでまいります。
また伊能忠敬翁没後２００年に向けて記念事業の検討を進めてまいります。
情報発信事業
伊能忠敬翁顕彰会会報の発行を行います。
調査研究事業と連携してＨＰコンテンツの作成を行ってまいります。
各地の顕彰会とのネットワークを構築してまいります。
墓前祭実施事業
命日の５月１７日には菩提寺である観福寺で墓前祭を執り行います。

ユネスコ記憶遺産国内公募申請の説明内容

「伊能忠敬は、１８世紀末から１９世紀初頭にかけて日本全国を測量しました。忠敬は、身分制度が存在し、海外との交流が制限されていたなかで、平民出身にもかかわらず、積極的にヨーロッパの知識・技術を学び、ヨーロッパの天文学と在来の技術を組み合わせ、欧米列強以外で初めて自国の人員によって自国の測量地図を作製しました。シーボルトやイギリス海軍は彼の地図を持ち帰り、ヨーロッパに正しい日本を紹介しました。また彼の地図は日本の近代化に貢献いたしました。
申請した資料から、ほぼ２００年前の、工業化以前の自然や文化の様相も窺い知ることができます。測量日記からは毎日の天候や測量の経緯を明らかにでき、山島方位記は故地磁気研究にも有効な素材です。さらに地図からは、近代以降の開発によって現在は失われてしまった地形・景観の復元も可能となります。またこうした地図は、科学的手法を用いて測量され実測図でありながら、伝統的な日本画の手法によって表現されていて、科学技術上の価値だけでなく、芸術的価値もあわせもっています。」

伊能忠敬翁所縁の人々　「内弟子筆頭　箱田良助」

箱田良助（一七九〇～一八六〇）は、備後深安郡箱田村（広島県福山市）庄屋細川園右衛門の次男です。良助は数学に関して若くして才能を発揮しました。
その才能に注目した親類でもあった谷東平（和算家にして伊能忠敬翁の下で天文、地理を学び、第二次測量に従事した）より、良助ならびに良助の兄である右忠太の両名に対して測量隊に参加するよう奨められたようです。
そして、第五次山陽地方測量の時に父園右衛門が忠敬翁へと入門依頼があり、正式に忠敬翁の下で学ぶこととなりました。その後は内弟子筆頭として九州第一次測量、第二次測量に参加し、大日本沿海輿地全図作成に貢献しました。
また、文化八年の九州測量の帰路には良助の生家に宿泊するなどの物的な支援、当時「当世随一の詩人」といわれた菅茶山と忠敬翁の交流を助けるなど測量の一員という枠を超えた部分でも忠敬翁を支えました。
文政五年（一八二二）、三十二歳で幕臣榎本武兵衛へ婿入りし、天文方江戸城暦局として幕臣になります。その後は、勘定定方となり旗本に加えられています。１８６０年８月７１歳でその生涯を終えました。

伊能忠敬翁所縁の人々
t「東京農業大学創始者榎本武揚　内弟子筆頭箱田良助の息子」

榎本武揚（一八三六～一九〇八）といえば、函館五稜郭の戦いで新選組の土方歳三と共に新政府軍と戦ったにもかかわらず、黒田清隆にその才能を惜しまれ助命されたばかりか、子爵の官位まで受けて近代日本の設立に貢献した人物です。また東京農業大学の創始者であることは広く知られております。
武揚は、徳川幕府の留学生としてオランダでヨーロッパの先進科学技術と国際法を学び、近代日本創生時の国際人でした。農商務大臣・逓信（郵政）大臣などの要職を務め、また当時のロシアと樺太交換条約をまとめて強国の帝政ロシアの脅威を取り除き、今ある日本の姿の基礎を築いた人物です。オランダ留学で、列強の中、我が国が近代国家としての地位を守るためには、国力の一翼を担う農業の重要性を強く認識して後の東京農業大学を創設しました。
明治政府にとって、助命までして欲しいと思わせた「才」とはどのように形成されたのか。その背景には忠敬翁が関係しています。実は武揚の父親こそ、忠敬翁筆頭内弟子である箱田良助なのです。箱田良助は本会報でもご紹介した秀才であり、詩人と忠敬翁を繋ぐなど教養と学問の重要性をよく理解している人物でした。
武揚は、幕府御用学者という父の立場にも恵まれ、幼少の頃から昌平坂学問所で儒学・漢学、ジョン万次郎の私塾で英語を学び、十九歳では樺太探検にも参加しました。
その後は、長崎海軍伝習所に入所しオランダへ留学。幕府海軍の副総裁となりました。その後の活躍は前に記した通りです。
敵に回った人物であっても欲しい「才」。
その根底には忠敬翁の下で学ぶ中で学問の重要性を知った良助の理解と応援があったのです。きっと武揚も幕府海軍のトップとして忠敬翁と父が作りあげた地図を見ながら日本の将来に思いをはせていたことでしょう。